

出世の条件 二十八項



はじめに

一生の仕事を見出した人には、ほかの幸福を探す必要はない…
19世紀のイギリスの思想家トーマス・カーライル（1795～1881年）の有名な言葉です。取りようによってはいかにも当たり前の言葉なのですが、なかなかその通りにならないのが世の中です。

同じく、カーライルの言葉には、「働くことができない、人間として使命を果たすことができない、これが結局、人間の唯一の不幸なのである」があります。

自分の仕事とは、自分が本当にやりたい仕事、命を賭けても悔いのない仕事、自分の性格・能力に最も適した仕事のことです。

実際には100%までとは行かなくても、70%が満たされていれば、その仕事に関して希望が持てるでしょうし、充実した生活も送れるに違いありません。したがって、まず職業の選択を間違えないことが肝心なのですが、今の職に就くにあたっては十分に考えたに違いありません。

職場というのは仕事の仲間の集まりです。仕事に全員が情熱を持って初めて同志という言葉も当てはまるのです。間違いのない職業選択であったなら、常にプロの意識を持たなければなりません。

就職先を決める最大のポイントは、自分をそこに置いてみて、信頼関係の存在や仲間意識、参画意識を予感できるかどうかという点にあるのでしょうか。

このような精神的結合の特性を「属人性」と呼んでいます。常に忘れずにこれを十分認識し続けることが、仕事の活性化や自己啓発のために非常に重要なのです。

経営者、そして上司から多くのことを学び、同僚と切磋琢磨する

中でこそ自己の進歩が見込めるのです。

会社の基本方針を理解し、自分の仕事に生きがいを感じなければ愛社精神も湧いてきません。会社の知名度、かっこよさだけにぶら下がっているような社員ではいつか行き詰まってくるものです。

まず、仕事の価値を見つめ、自分の仕事をもう一度確認し直すことが大切です。

より良きコミュニケーションを図るにはどうすれば良いか、今一度考えてみましょう。一人ひとりが自分と会社との精神的結びつきを、深く再確認することによって、職場は情熱の塊となってみるみる活性化されます。それと同時に、自己啓発への努力もぐんと押し上げられるに違いありません。

本書のタイトルは「出世…」です。語源は仏教用語で、世俗の煩惱を超越して悟りを得ること、あるいは僧侶になることを意味しています。そのため、俗世界の中で成功していく様に使われるのはおかしいのでは…とも思えますが、高い地位や役職につく、収入が増えるといった現代用語の意味とは関係なく、社内外で自身の能力が評価され、自分でも自負心を持てるようになれば、それを「出世」と言っても良いのではないのでしょうか。

そうした意味から、いわゆる「出世」をあえて望まない人でも、「仕事とは何ぞや」を見つめ直すきっかけとして、本書を活用していただければ幸いです。

出世の条件 1

「仕事」と「作業」とは違う

今、自分は「作業」をしているのか、「仕事」をしているのかを絶えず自問自答すると良いでしょう。自分が仕事に取り組む姿勢を矯正すれば、自ずとやり方が変わってくるはずですが、ただ与えられた仕事をこなすだけでは作業をしているに過ぎません。それを、自主的・創造的に行うことによって、「改善」が生まれてくるのです。働きがいを感じるためには、以下のような条件が必要です。

- ① 目先の収入よりも長期的視野に立つこと
- ② 仕事の模範になる先輩を作ること
- ③ 全体の中で自分の仕事の位置付けを知ること
- ④ 他の仕事との関連を考えること

日本一という言葉があります。口にすると少し気恥ずかしく聞こえるかもしれませんが、与えられた仕事に対しては、常に「つまらない」と思わずに自負を持って遂行することです。小さな会社では、個人に任せられる仕事の範囲は広くなりがちですが、大会社では部分的な仕事のエキスパートになることが要求されます。そういう意味では、大組織の方が作業的な仕事になりやすいものです。

仕事をする場合、自分自身だけの問題とせず、他の人との関係がうまくいかなければ成功しないということにも留意しておかなければなりません。縦の関係、横の関係、集団としての思考、チームワークをしっかりと認識することです。自分が燃える以上に他人を燃えさせなければ「仕事」はできないのです。

出世の条件 2

自分の取り柄は何か

人間は万物の霊長と言われていました。人間だけが他の動物にない特別な才能を授けられて、今日の様々な文明を築いてきました。それだけに人間は顔や身体の動作が違うように、それぞれ違った能力を持ち合わせています。

「人はその道によって賢し」とも言われますが、文化が高度になればなるほど、分業化し、専門家せざるを得ない状況が増えていきます。

したがって、あまり欲張るとかえって何もできなくなるものです。器用貧乏とはそれを指す言葉ですが、物事を狭く深く追求していけば誰でも専門家になれるはずです。

「何の取り柄もない男でして…」などと言う人がよくいますが、謙遜ならまだしも、実際に自分の取り柄を発見できずにいるようでは、自分の特徴を生かしたり伸ばしたりすることはできません。

同じ事をやっても、人が変われば受ける感じも違い、人に与える影響や結果も異なります。それがその人の持ち味というものなのです。

持ち味を出すためには、次の点に留意すると良いでしょう。

- ①目的を考える
- ②合理性を貫く
- ③効果を考える

出世の条件3

仕事即金銭の意識に徹する

仕事ばかりしているとストレスが溜まります。時には疲れてしまって仕事が嫌になることもあるでしょう。同じことを毎日やっていると嫌気がさす。それでも働かなければならないのです。

しかし、そんなときに能率が上がるわけがありません。

そこで仕事を金銭に換算したり、札束を連想しながら進めるのも一つの方法です。

ある出版社の校正係は、地味で根気のいるこの仕事の能率を上げるために、「ゲラ刷り一枚一枚を千円札か一万円札に見立てながらやっている…」と書いていました。まさに、これがプロ意識だというものです。セールスマンなら、自分の販売高は金額で表されるので、当月のノルマや目標に対する達成度合いがはっきりとわかります。その成績によって、手当や歩合が増減するわけですから、訪問する一軒一軒の社名や表札が一万円札に見えてくるようになれば、まさにプロセールスマンというわけです。

給料は与えられるものでなく、自分で勝ち取るものです。

「ただ勤めている」という安易な気持ちでは、サボり根性も出てくるし、愚痴が多くなるものです。

金銭の話をするのは卑しいことだ、などと武士道のような教育を受け、「カネは汚い」と信じている人も多いかもしれませんが、自分の価値や信用を表すものの一つが「お金」です。「仕事」に対する正当な「評価」を得て、自身が納得をするためにも、「金銭感覚」は必要です。それが、いまどきの「働き方」なのです。

出世の条件 4

仕事は自分で作るもの

昔は、「不言実行」「沈黙は金、雄弁は銀」とか言われ、あまり喋らない人間の方が重みがあって良いとされていた時代があります。

しかし、現代では、SNSをはじめ、お互いのコミュニケーションを取る場面がより活発になっています。口下手でコツコツ勉強するタイプよりも、口達者な人間の方が、なにかと得をするという世の中です。つまり「有言不実行」では困りますが、「有言実行」タイプが良いというわけです。

ところでPR上手とは弁が立つとか、喋るのが上手だということではありません。

職場内であれば、自分の仕事に対する取り組み方について、上司や同僚、部下など社内関係者によく理解してもらい、信用してもらわなければなりません。そこで、もし喋るのが下手だということであれば、文書を配って仕事を進めていく方法をとれば、口下手であるというマイナス要因は、関係がないものとなります。

要するに伝達の方法は、その人の持ち味を生かしてケースバイケースで良いのです。

仕事は与えられるものではなく自分で作るものだと言われます。

待っているだけでは、社外であろうが社内であろうが、だれも自身の存在に気がついてくれません。こちらから積極的にアプローチしてPRしてこそ、仕事の幅や奥深さが増していきます。

自分なりの効果的な売り込み方やパターンを考え、準備しておくことが大切です。

出世の条件 5

時間に合わせて仕事をする

仕事を計画的にやるにはプランニング、スケジュールリング、フォローアップの三段階の手続きを上手に行うことです。仕事がスムーズにいかないと、つい嫌気がさしたり、気持ちが悪く感じたりするものです。仕事に時間を合わせるか、時間に仕事を合わせるかで、気分はずいぶん違ったものになっていきます。

「時は金なり」と言われます。これは時間の大切なことを説いているとも言えますし、同じ時間に能率よく、より多くの仕事をすることの意義を説いているともとれます。

確かに私たちは時間で行動しています。お金を引き出したくても銀行は9時にならなければ開きません。また午後3時にはシャッターが降りてしまいます。もっとも預金を下ろすだけであれば、銀行やコンビニエンスストアのATMを利用すれば良いので、時間の概念も時代とともに変化しています。

仕事というのは、欲を出せばキリがなく、創造的な良い仕事をしようと思えば思うほど時間的観念が乏しくなり、ビジネスから遠ざかっていきます。もし、働くことの第一の目的が収入を得ることであれば、時間に合わせて仕事をするのが大切です。

業種、業態などによって違いはあるものの、一般的には、「**自分の給料の三倍の付加価値を稼がなければ一人前ではない**」とされています。まさに「時は金なり」なのですが、金・金・金では、やはりギスギスと卑しい関係になってしまうので、人間味のある豊かな交わりが重要なのです。

就業時間をどう考えるか

「働きやすさ」というテーマを考えるときは、立場、立場で考え方、視点が変わってくるので、少々慎重にならざるを得ません。

勤務時間の問題は、業種・業態・職種・企業によって大きな差異があるので、個々の実情に即して考えることです。

拘束時間が長いというのは、とかく不満のタネになりやすいものです。商店や飲食店のようなサービス業や小売業の場合は、どうしても営業時間の関係から拘束時間が長くなりがちです。しかし、あなたはそのような営業特性はとっくに承知の上で就職しているはずです。だから、それをもって不満とするのは元来おかしいのです。ただ、労働時間の短縮は、世の中の趨勢であることも確かなので、どのようにすれば適切な調整が図れるか提案をしてみてもいいでしょうか。勤務時間は1日に何時から何時までと定める必要はありません。とはいっても、一人一人というわけにはいかないので、3パターンぐらいの交代制ということが現実的でしょう。労働基準法に定める線に持っていくために、休憩時間を長く設定する場合があります。完全には解放されない準拘束時間になりがちなので営業時間の改善を申し出てもいいでしょう。

もちろん、会社の都合もあります。ただ、「拘束時間が長い」と不満をぶちまけていても、合理的な提案を伴わなければ経営者は相手にしてくれません。長い拘束時間は承知の上でお互い労働契約を結んでいるから、当然のことです。解決のためには、建設的な雰囲気の中で話し合いを進めていくことが肝心です。

出世の条件7

仕事の適性とは何か

「どうも仕事がつまらない、退屈だ」と感じるようでは、要注意です。「退屈だ」というのは、職場の仕事の流れや雑用の処理などが偏っていてスムーズにいかない、上司の管理の仕方が原因の場合もあります。

せっかく自分がやろうと思っていても、気を削がれ、押しつぶされては、やり場がなくなるのは当然です。そうしたムードに陥らないよう前向きに対処するためには、職場での話し合いが大切です。「出る杭は打たれる」と言われますが、建設的な意見なのであれば、打たれても簡単に引っ込める必要もないわけです。大事なのは、仕事を面白くする工夫なり、ムード作りです。

「仕事がつまらない」というのには、基本的なところで、その仕事の意義なり、目的を十分に理解していないことにも原因があります。自分の仕事について、広い視野でもう一度定義付けをしてみましょう。そのためには、社内の上司、先輩、同業他社の知り合いなどに積極的に取材し、親交を温める中で体験談なり意見を聞くのも一つの方法です。「自分たちの仕事」をテーマにして、勉強会を持つのもいいでしょう。そうすると、これまで気がつかなかった仕事の新しい側面、魅力が発見できるかもしれません。

「自分はこの仕事に向いていないから他社へ行く」とか「配置転換を要求する」というのではなく、まず今の仕事を深く知りましょう。少々きつい言い方になりますが、向き不向きは関係なく一つの仕事ができない人間は、他の仕事もやはりできないものなのです。

出世の条件 8

仕事は計画と段取りが肝心

「時間にせかせか追いまくられて、一息つく暇もない」「仕事量に対しての人数が少ない、もっと人員を増やしてほしい」といった不満をよく耳にします。

しかし、考えてみると、どんな仕事でも忙しい時はあります。また、それがなければ困るのです。忙しいのは商売繁盛で、嬉しい悲鳴なのです。逆に暇になれば、人員が減らされるといったこともあるわけですから、あまり不満を漏らさないことです。

「忙しいのは大変結構なこと」と心得て仕事を計画的に段取りよくやれば、心は落ち着き、余裕が出てくるものです。チームワークの要求される仕事では、マネージャーの采配力がものを言うのです。「今日はどれだけ稼げば良いか」という販売目標をもって仕事に臨みましょう。ただ闇雲に働く必要はありません。目標をクリアすることだけを念頭に置いておけば良いのです。

目標を持たず、ただ忙しさの中に身を置いて仕事をしていると、つい「せかせかと追い立てられる」といった気分になってしまがちです。仕事は計画と段取りでほぼ全てが決まってしまう。立てた目標に向かって、どうすればそれがクリアできるか、仕事に取り組む前に逐一吟味し、できることを準備しなくてはならないのです。

「自分だけ忙しい」という偏狭な考えを捨てて、トータルで仕事の流れを見直せば、自分の立場、なすべき仕事、必要な気配りが見えてきます。

自己申告でギャップを埋める

いくら新しい制度を作っても、人間が人間を評価するのですから、やはり、どこかに不都合、不満な点が出てくるものです。

しかし、そういう不満をくすぶらせずに、いろいろと意見を出し合い、制度をより良いものとなっていくように、少しずつ手直ししていけば良いのです。

この公平な評価に近づける方策として取り入れたいのは、「自己申告制度」です。上の者から見た評価だけで効果をせずに、被考課者である当人が思うところを語るのです。

時間も5分とか10分とか短い時間にはせずに、30分ないしは1時間ぐらいとり、たっぷりと自己表現をさせます。

しかし、改めて話をするとなると、自分の考えをうまく言えない、という者もいるでしょう。

そこで、それを補うために、あらかじめ自己申告書を提出するようにして、それを参考にしながら面談を進めていけば良いのです。

話す方も、一度自分で文章に整理しているのですから、どのように、何を話すべきかが頭に入っているのですから、きっとわかりやすく話すことができるはずで

す。これと関連することですが、給料が仕事のわりに低いと感じている者も多くいます。これは当然とも言える面もあり、「低いと思わない」という人は、よほど高い賃金をもらっている人か、仕事にあまり愛情と熱意を持ってない人なのです。

文書で伝達する

社員は事務や作業方法の改善について積極的に意見を出していく必要があります。実際に仕事に携わっている人間が、その仕事を一番よく理解しているのですから、仕事を進める上での問題点もよくわかっているはずです。

特にコミュニケーションの問題を考える場合、事務部門の仕事の改善が重要です。なぜなら、仕事の進行状況や情報が帳票を通じて関係部門に伝達されていくのですから、事務作業というのはコミュニケーションの用具なのです。最近では、グループウェアなどを使った直接的な情報共有化もありますが、その仕組みを動かしていくのも、事務部門の仕事の一つなのです。

また、職場では、業務の進行がたとえその担当者がいなくてもわかるようになっていくことが大切です。

担当者しかわからないようだと、その本人が休んでしまえば仕事がストップしてしまいます。

この場合、その仕事が外部の人間を相手にするものならば、仕事がストップしたことによる弊害はあっという間に大きくなるのです。

こういった弊害をなくすには、重要な事項は必ず文書に伝達するように制度化することです。

口頭だけでやり取りをしていると、後から「言った、言わない」というようなトラブルが発生しがちです。

だから、記録に残すことが大切なのです。

近代中小企業 Vol.53 No.11 付録 出世の条件 二十八項

編者：中小企業経営研究会

発行者：芦澤貞春／発行所：中小企業経営研究会

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-33-13 千年ビル 8F 株式会社データエージェント内

電話 03-5272-5425 ©2018 Dataagent

ISBN 978-4-909222-36-7 C0034 定価：本体500円＋税

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。著作権から本書の一部あるいは全部について、
無断で転載・複製することは固く禁じられています。